

[社 会]

高田事件を取り扱った中学校社会科の授業実践に関する一考察 - 地域史を活用した市民的資質の育成に着目して -

仙田 健一*

1 研究の目的

現代社会において、民主的な社会の形成者としての資質を育むことは、学校教育の重要な使命の一つである。特に社会科は、市民的資質の育成を直接的に担う教科として位置付けられている。文部科学省の「中学校学習指導要領（平成29年告示）」では、「広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力¹⁾」を明確に目標として掲げている。ここでいう「公民」は「市民社会の一員としての市民と国家の成員としての国民という二つの性格を合わせもつ概念²⁾」を有しており、公民的資質も市民的資質も英語表記では「citizenship」である。

永田忠道は「社会科での公民的資質・市民的資質の育成には『社会認識を通して』との前提条件が欠かせない³⁾」と指摘する。しかし、「社会認識を通して」という要件さえ満たせば、どのような市民的資質でも許容されるのかという疑問が残る。この点について、森分孝治は「社会認識とは別に市民的資質があるわけではない。誰もが形成してきている社会認識体制が、社会的な知識・判断の体系が、市民的資質の中身⁴⁾」であると論じている。つまり、市民的資質は抽象的に存在するものではなく、具体的な社会認識の枠組みの中に内包されるものと理解できる。

このような議論を踏まえると、社会科教育においては単なる理念論にとどまるのではなく、日々の授業実践を通して市民的資質をいかに形成していくのかを検討することが求められている。とりわけ地域史の活用は、生徒自身が生活する地域を舞台として「社会がどのように成立し、どのような価値観・制度のもとで変容してきたのか」を具体的に理解する契機となり、社会認識の枠組みを自らの文脈で構築するために極めて有効である⁵⁾。地域の過去の出来事を、現在の自分自身や地域社会の課題とつなげて考えることで、社会に関わるための市民的資質が喚起されると考えられる。

そこで本研究では、市民的資質の育成を目指した中学校社会科の授業実践、その中でも地域史教材を活用した実践に着目し、生徒にどのような市民的資質が形成されたのか、その成果と課題を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法と分析について

(1) 市民的資質と「学習指導要領」の位置づけ

前節で述べたように「市民的資質」に関する捉え方は、先行研究や理論によって多様である。しかし、教育実践においては、その抽象的な理念を具体的な生徒の姿に落とし込むことが求められる。その際、教員が授業実践の指標とするのが「中学校学習指導要領（平成29年告示）」である。中学校社会科の教科目標（3）には、評定の対象とならない目標（下線は執筆者。以下、同じ）が次のように示されている⁶⁾。

教科目標

(3) 社会的な事象について、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の国土や歴史に対する愛情、国民主権を担う公民として、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることや、他国や他国の文化を尊重することの大切さについての自覚などを深める。

観点及びその趣旨

社会的な事象について、国家及び社会の担い手として、よりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとしている。

上記の「教科目標」の後半部で述べられている内容は、観点別学習状況の評価にはなじまず、個人内評価の対象とさ

*糸魚川市立糸魚川中学校

れる。一方、「観点及びその趣旨」には、「主体的に学習に取り組む態度」が示されている。したがって、この後半部の目標こそが、社会科が担うべき「市民的資質」を具体化する基盤と捉えることができる。

さらに歴史的分野では「歴史に関わる諸事象について、(中略)多面的・多角的な考察や深い理解を通して涵養される我が国の歴史に対する愛情、国民としての自覚、国家及び社会並びに文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる文化遺産を尊重しようとする事の大切さについての自覚などを深め、国際協調の精神を養う⁷⁾」が明記されており、市民的資質の育成と直結しているといえる。

(2) 現状の課題とアンケート調査について

こうした目標を踏まえ、上越市内に位置している中学校の2年生の生徒を対象にアンケート調査(n=30, 2024年5月13日)を実施した。その結果は以下の通りである。

この結果から、多くの生徒は自由民権運動そのものについて十分に理解しておらず、とりわけ上越地方との関連性については、ほとんど知らないことが明らかになった。つまり、生徒は自由民権運動を自分たちの生活や地域と結び付けて捉えていないのである。

表1 自由民権運動に関する生徒のレディネス

アンケート項目 (n=30)	はい	どちらかという とはい	どちらかという といいえ	いいえ
①自由民権運動について知っているか。	13.3% (4人)	23.3% (7人)	20% (6人)	43.3% (13人)
②自由民権運動と上越地方の関わりを知っているか。	3.3% (1人)	0% (0人)	16.7% (5人)	80% (24人)

表中の数値は左側がパーセント、()が人数。

そこで本研究では「中学校学習指導要領(平成29年告示)」の歴史的分野の教科目標に示される「国民としての自覚」を「市民としての自覚」と読み替え、その育成を授業実践の目標とした。ここでいう「自覚」とは「自己自身の置かれている一定の状況を媒介として、そこにおける自己の位置・能力・価値・義務・使命などを知ること⁸⁾」であり、その基盤は「自分自身がどのような歴史的背景をもつ地域で生きているのかを知ること」であると考えられる。

この観点から明治初期の自由民権運動の一事例である新潟県上越地方において起こった高田事件を教材として、単元を構想した。高田事件には「拘引状」や「頸城自由党員の体験談」といった史料が現存しており、生徒はこれらを通して、当時の人々がどのように考え、身近な地域のために行動したのかを具体的に考察できる。このような地域史料に基づく学習は、歴史を抽象的に学ぶのではなく、自らをその歴史の文脈に位置付ける契機となる。そのような生徒の姿をアンケート調査、授業記録、生徒の振り返りから分析し、その変容を考察する。

3 単元の構想と実際

(1) 単元名

歴史的分野 (1) 近代の日本と世界 (イ) 明治維新と近代国家 (ウ) 議会政治の始まりと国際社会との関わり
「高田事件から上越のあゆみを学ぼう～自由民権運動と高田の市民の関わり～」

(2) 単元の目標

- ・明治時代の開国とその影響、富国強兵・殖産興業政策、文明開化の風潮などを基に、明治維新によって近代国家の基礎が整えられ、人々の生活が大きく変化したことを理解する(知識・技能)。
- ・自由民権運動、大日本帝国憲法の制定などを基に、立憲制の国家が成立し、議会政治が始まったことを理解する(知識・技能)。
- ・明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりに着目し、近代社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する(思考・判断・表現)。
- ・よりよい社会の実現を視野に明治時代の歴史的事象に関する課題を主体的に追究する態度を養う(主体的に学習に取り組む態度)。

(3) 単元の位置付け

本単元は「中学校学習指導要領(平成29年告示)」の「(1) 近代の日本と世界」における「(イ) 明治維新と近代国家」と「(ウ) 議会政治の始まりと国際社会」の内容である。『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』では、明治維新の内容の取り扱いについて、「『複雑な国際情勢の中で独立を保ち、近代国家を形成していった政府や人々の努力』(内容の取扱い)に気付くことができるようにするとともに、近世の政治や社会との違いに着目して、近世から近代への転換の様子に気付くことができるようにする」ことが示されている。また、自由民権運動、大日本帝国憲法の制

定については「自由民権運動の全国的な広がり、政党の結成、憲法の制定課程とその内容の特徴を扱うようにする」ことが記述されている。その際に「立憲制の国家が成立して議会政治が始まったことの『歴史上の意義や現代の政治とのつながり』(内容の取扱い)に気付くことができるようにする⁹⁾」ことが示されている。一方、これまでの歴史的分野の学習では、自由民権運動を中央の歴史として捉え、自分自身や現代の政治とのつながりを感じるのが難しかった。

本単元で扱う高田事件は、明治初期(1883年)に起きた自由民権運動に対する政府の弾圧事件である。この事件によって新潟県上越地方を基盤とした頸城自由党の主要党員が内乱陰謀を理由に一斉検挙されたのである。その真相については不明な部分もあるが、裁判所と警察署が仕組んだ冤罪とされている¹⁰⁾。高田事件を取り上げることで「なぜ、身近な地域の人々は自由民権運動に参加したのか」「その後の上越地方(高田)にどのような影響を与えたのか」について生徒が考察することができると思われる。

(4) 生徒の実態

授業実践を行う中学2年生30名を対象とし、生徒の実態をアンケート調査で把握した(2024年5月13日実施)。表2のように社会科を好きな生徒は

86.6%(26人)であった。その理由として「歴史は物語のようで面白い」や「歴史で昔のことを知れることがよい」などと記述している。あまり好きではない生徒は「覚えることが多い」や「聞き慣れない用語が多く、苦手意識をもって回答している」と回答している。このように中学校社会科で取り扱う内容、とりわけ歴史的分野の内容と自分自身を結び付けて考えることができているのである。

このことから高田事件を取り上げることで、全国的な広がりをもつ自由民権運動と地域史を結び付け、歴史の中に生きる自己を実感することができると思えた。これらの単元の位置付けと生徒の実態から評価と単元の指導計画を作成した。

表2 社会科の学習に対する興味・関心

とても好き	好き	あまり好きではない	好きではない
26.6%(8人)	60%(18人)	10%(3人)	3.3%(1人)

表中の数値は左側がパーセント、()が人数。

表3 単元の評価

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・明治時代の開国とその影響、富国強兵・殖産興業政策、文明開化の風潮などを基に、明治維新によって近代国家の基礎が整えられ、人々の生活が大きく変化したことを理解している。 ・自由民権運動、大日本帝国憲法の制定などを基に、立憲制の国家が成立し、議会政治が始まったことを理解している。 	明治維新と近代国家の形成、議会政治の始まりに着目し、近代社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	よりよい社会の実現を視野に明治時代の歴史的事象に関する課題を主体的に追究しようとしている。

表4 単元の指導計画(7時間) ○評定に用いる評価 ●学習改善につなげる評価¹¹⁾

時	◎目標	・学習活動	評価の観点		
			知	思	態
1	◎開国と明治維新の影響を天皇の服装の変化や好物、明治政府の政策に着目し、理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・明治天皇は江戸から明治に変わったときに服装や好物が変化したのかを考える。 ・五箇条の御誓文、版籍奉還、廃藩置県、四民平等、解放令が人々にどのような影響を与えたのかを考える。 	● ノ		● ア
2	◎明治維新によって近代国家の基礎が整えられ、人々の生活が大きく変化したことについて多面的・多角的に考察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の学校がどのような立場の人々によって建てられたのかを考える。 ・徴兵令の免除条件を考え、当時の人々にとって兵役はどのようなものだったのかを考える。 ・地券を読み取り、農村の生活は楽になったのかを考える。 		○ 振	
3	◎明治の錦絵や新しい思想について、江戸時代と明治初期の変化に着目し、多面的・多角的に考察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・明治の町の様子絵から江戸時代から変わったところを発見する。 ・発見したことを衣食住、交通に整理し、発表する。 ・福澤諭吉や中江兆民が伝えた新しい思想は人々にどのような影響を与えたのかを考える。 		● ワ	
4	◎高田事件から国家及び社会の発展や人々の生活の向上に尽した先人の行動を認識し、上越地方に生きる自覚を涵養する。	<ul style="list-style-type: none"> ・板垣退助の民撰議院設立の建白書が議会の開設を求めていること(自由民権運動)を確認する。 ・士族の反乱と激化事件を示した地図から高田事件に気付く。 ・高田事件の逮捕者に関する資料から上越市内の地名が書かれていることを確認する。 ・なぜ、高田の人々は自由民権運動に参加したのかを考える。 ・高田事件を含めた自由民権運動の意義をまとめる。 			● ワ
5	◎明治時代の外交の内容や変化について、征韓論に関する議論に着目し、理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・征韓論は明治の政策として、正しかったのか、間違っていたのかを考える。 ・日本と清、朝鮮、ロシア、琉球の外交上の取り決めをまとめる。 	○ ノ		
6	◎明治の選挙や国会について、現代との違いに着目し、多面的・多角的に考察する。	<ul style="list-style-type: none"> ・当時の選挙の様子をシミュレーションで体験する(立ち会う警察官や氏名が必要であることを確認する)。 ・どのような人々に選挙権があったのかを確認し、現代との違いをまとめる。 		● ワ	

7	◎明治の上越はどこに鉄道を引くべきかを考えることを通して、室孝次郎の功績に気づき、上越地方の変化を主体的に追究する。	・室孝次郎（信越本線の敷設に尽力した人物）の石碑を見て、どのような人物の石碑かを確認する。 ・明治の上越のどこに鉄道を引くべきかを地図を基に考える。 ・自由民権運動と信越本線の開通が関わっていることを資料で確認し、明治の上越地方の変化をまとめる。			○振
---	--	---	--	--	----

(5) 学びの実際

本単元（全7時間）では、1～3時間目で、明治初期の背景や変化を理解することとした。4時間目は、その背景を基に上越地方ではどのような変化が起こったのかを捉えることとした。5～7時間目は、国全体の政治的な変容と上越地方の変容を関連付けて理解することとした。以下では、本研究の目的と最も関わる自由民権運動と高田事件に関する学習である4時間目を中心に生徒主語で記述している。

① 1～3時間目

1時間目は、江戸時代と明治初期の天皇の姿を比較し、政治の中心が天皇に変わったことを確認した。次に版籍奉還や廃藩置県による中央集権化、四民平等政策の矛盾について考えた。明治初期の一揆の数が減っていないことを理由に、生徒は「明治維新は意外と不評だったのではないか」という振り返りを記述した。2時間目は、「富国」とはどのような国家かを考えた。そのための政策である学制、徴兵令や地租改正の影響を考察した。地券を読み取った生徒は「一見すると税負担をお金でするようになり、楽になっていると感じたがそれほど少ない金額ではないことがわかった」と発言した。このように政府の政策と国民（市民）の評価が一致しない場合が数多くあったことを捉えた。3時間目は、明治時代の錦絵を読み取り、文明開化といった日本の変化に影響をもたらしたことを確認した。中江兆民や福澤諭吉の事例から西洋の思想が明治の人々の考え方に影響を与えたことを捉えた。生徒は「外国文化と日本文化が混ざり合う独自の文化が形成された」といった振り返りを記述した。このような西洋の文化や思想が都市から地方に流入していく高田事件に至る明治時代の背景を理解した。

② 4時間目（高田事件に関する学習）

4時間目は、自由民権運動の激化事件の一つである高田事件を中心に自由民権運動の意義を考察していった。導入では、板垣退助の写真や民撰議員設立建白書を手掛かりに、国会の開設を求める自由民権運動の目的を確認した。小学校での既習事項である自由民権運動を生徒同士で確認し、想起した。

次に全国の激化事件に関する地図を見て、身近な地域である上越地方で1883年に高田事件が起こっていたこと、自由民権運動の全国的な広がりを確認した。その地図から高田事件を見つけた生徒は「高田で自由民権運動があったことは知らなかった」と発言した。資料である「高田事件で検挙された頸城自由党・北辰自由党関係者」を見て、高田事件の逮捕者の住所や背景を調べ、「頸城自由党という組織があったことに驚いた」や「潟町や直江津などの知っている地名がある」と自分たちの生活圏と高田事件の関係者が関連していることに気付いた。

そこで「なぜ、高田（上越地方）の人々は自由民権運動に参加したのか」をグループで考えた。資料1の青年期に高田事件に参加し拘留され、上杉村（現・上越市三和区）の村長、県会議員になった上田良平（1861～1951年）と高田事件で収監され、その後1890年に第1回衆議院議員総選挙で初当選した鈴木昌司らの生涯を参考とした。

資料1 上田良平（1861～1951年）と鈴木昌司（1841～1895年）の生涯の概略¹²⁾

<p>上田良平は1861年（文久元年）、井ノ口村（現・三和区井ノ口）の肝煎（きもいり＝庄屋）の家に生まれた。明治維新の激動は、良平にも国の政治や人々の生活について深く考える機会を与えた。青年期の良平は演説会などにたびたび出席し、次第に自由民権運動に引き込まれていった。</p> <p>1883年（明治16年）に、頸城自由党員弾圧のために警察主導で発生した高田事件では、良平も拘留された。留置所から出て移動する際には腰縄をかけられ、黒い覆面をかぶせられるという屈辱を味わった。生涯忘れえぬ事件となった。</p> <p>1889年（明治22年）、上杉村（現・三和区の一部）村会議員に当選、同じ年には上杉村長となった（27歳のとき）。その後30年にもわたって、上杉村の村長を務めることになる。道路や用水の整備、教育の普及などに尽力し、村長を務めながら県会議員も務めた。立憲政友会新潟支部を結成、県会議長にも選ばれて、県政においても大いに活躍した。</p>	<p>鈴木昌司は1841年（天保12年）、代石村（現吉川区代石）の庄屋の長男として生まれた。富裕な庄屋の長男として幼い頃から漢学を学び、青年となってからは戸長や副大区長を務めるなど恵まれた少年、青年期を送った。1873年（明治6年）、地租改正条例が発令されると、農村における権利意識が大きく高まった。この流れは全国的な地租改正反対一揆や、その後の自由民権運動などと結びついていった。昌司も地域のまとめ役としてこの流れに飛び込んだ。</p> <p>1883年（明治16年）の高田事件では、鈴木昌司は集会条例違反として投獄され取調べを受けた。</p> <p>1890年（明治23年）7月、第一回衆議院議員選挙が実施され、鈴木昌司は室孝次郎とともに衆議院議員に当選した。その後、頸城自由党と上越立憲改進黨の合併を図り、立憲自由党を足踏させました。</p>
--	--

グループでは、上田良平は青年期から政治への関心が高かったこと、鈴木昌司は地租改正反対をきっかけとしていたことを読み取り、生徒同士で共有した。どちらも裕福な農民出身であり、政治的な関心が高く、自分自身の利益のためではないことや「高田地方は米どころであり、地租改正に反対だった」「地元意見を政府に伝えるため」「地元をより

よくするため」「集会や言論の自由が欲しかったから」「農民の権利意識が高まったから」などが自由民権運動に参加した動機であることを考察した。そして、資料2を読み、民衆の政治活動の結果が現在の上越地方につながっていることを捉えた。

終末では「高田事件を含めた自由民権運動の意義」をまとめた。生徒は以下のような振り返りを記述した。

資料2 高田事件最後の生存者・上田良平からの聞き取り¹³⁾

君らは信越線開通について室孝次郎や大井茂作らの活動ばかりいうが、鈴木昌司や八木原繁社らの裏面工作がなかったら、あんなに早く鉄道は敷けなかったんだよ。なんの理由もなく数十日も監獄へぶち込まれた自由党の諸君の鬱憤(うづぶ)を鈴木らは上京して、政府へこの始末をどうしてくれる…とねじこみ、数日間滞在して、山県や伊藤・大隈に強硬に抗議し、最後は信越の間に問題となっていた鉄道敷設を即座に実施し、地方開発を計ることで和解して来たんだよ。

表5 4時間目の生徒の振り返り

- ・今日は自由民権運動について学習しました。自由民権運動をすることで、国民が主体となった政治が行われ、より良い国になったのではないかと思います。また、経済的に発展するためにも、国会などを開設し、人同士の差をなくしていくことが大切だと思いました。
- ・高田事件を含め、自由民権運動の意義は何かを考えました。その意義とは、全て上の人たちが決めるのではなく、民衆も政治に参加するという風潮をつくること、国民の自由と権利を自分たちでつくり出すことではないかと思いました。
- ・自由民権運動の意義は、国民の権利を主張して、政府などに搾取されないようにする意識を国民に芽生えさせること、人には自由そして権利が存在するというを公にするためではないかと考えました。

③ 5～7時間目

5時間目では、高田事件に影響を与えた板垣退助がその後、どのような行動を起こしたのかを捉えた。生徒は、岩倉使節団の写真を確認し、国内に残った板垣退助や西郷隆盛と対立していたことを知った。次に征韓論は明治政府の政策として正しかったのか、間違っていたのかを考え、意見交換した。そして、日本と清、朝鮮、ロシア、琉球との間に結ばれた外交上の取り決めを整理することで、当時の日本の立場を捉えた。6時間目は、大日本帝国憲法発布式の写真を見て、天皇の権限が非常に強かったことを確認した。次に当時の選挙をシミュレーションする活動で、警察官が立ち会うことや氏名の公開が必要だったことを体験した。そして、生徒は選挙権を持っていたのは一部の富裕層に限られており、現代の選挙と大きく違うことを捉えた。7時間目は、中学校の近くにある室孝次郎の石碑を見て、信越本線の敷設に尽力した人物であることを知った。次に日本で最初に長距離鉄道が引かれたのは、直江津と東京の上野の間であることを確認し、明治の上越地方のどこに鉄道を引くべきかを地図上に線で示した。そして、室孝次郎が、その資金をどのように集めたのかについて考えた。終末では、自由民権運動と信越本線の開通が関わっていることを資料から読み取り、上越地方が大きく変化したことをまとめた。生徒は「上越地方の現在と明治時代がつながっていることが具体的な事例から分かった」「信越本線の開通は、自由民権運動の影響である理由を理解できた」「地域に残る鉄道と政治が結び付いていると感じた」というまとめを記述した。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

本研究の成果を以下のアンケート（事後アンケートは2024年5月24日実施）と4時間目の振り返りに基づいて示していきたい。表6のように①

表6 自由民権運動に関する生徒のアンケート

自由民権運動への認識が13.3%（4人）から63.3%（19人）へ、②上越地方の関わりが3.3%（1人）から50%（15人）へと大きく

アンケート項目 (n=30)		はい	どちらかというといはい	どちらかというといいえ	いいえ
①自由民権運動について知っているか。	前	13.3% (4人)	23.3% (7人)	20% (6人)	43.3% (13人)
	後	63.3% (19人)	23.3% (7人)	13.3% (4人)	0% (0人)
②自由民権運動と上越地方の関わりを知っているか。	前	3.3% (1人)	0% (0人)	16.7% (5人)	80% (24人)
	後	50% (15人)	26.6% (8人)	23.3% (7人)	0% (0人)

表中の数値は左側がパーセント、()が人数。

く変容した。また、表6の②で「はい」と答えた理由として「高田事件のように地元の人々が行動することで中央政府を動かしたから」「高田事件は国民の自由と権利を自分たちでつくり出す自由民権運動の一つと分かったから」といった記述がみられた。このように生徒は「どのような歴史のある地域の中で自分自身は生きているのかを知ることができたといえる。これらは、高田事件を歴史的事実として理解するにとどまらず、政治への主体的参加や権利意識といった今日的な社会課題と関連付けて捉えようとする認識の深化を示している。このような認識の形成は、頸城自由党員の生涯や証言などの地域史料を通して、出来事を自らの生活圏に根ざした歴史として捉えたことによって促されたも

のである。地域史料を活用することで、生徒は歴史を「自分の生活圏の中で生じた出来事」として実感を伴って理解し、過去と現在を結び付けて考察することが可能となった。これは森分孝治が示す「社会認識体制」としての市民的資質が、地域史料を媒介とすることで具体的な学習効果として表出した一事例といえる。

本研究では、高田事件を教材としたが、その意義は上越地方の歴史的分野の学習に留まらない。地域教材を取り上げることによって、生徒は「自分自身がどのような歴史の中で生きているのか」を自覚し、歴史を抽象的な知識としてではなく、身近な地域に根ざしたものであるという実感をもつことができた。こうした実感は、地域社会に生きる一員として社会をよりよくしようとする態度の基盤となる。したがって、本研究の成果は「高田事件」という個別事例に限定されるものではなく、各地域の歴史的事象を教材化することで中学校社会科において市民的資質を育成する可能性を示唆するものである。

(2) 課題

本研究の課題としては、第一に「歴史的事象と現代的な社会の課題への接続」が生徒によって十分に深められなかった点が挙げられる。自由民権運動の意義を理解しつつも、それを現代の政治参加や地域社会への関わり方にまで発展させる思考には個人差がみられた。第二に、授業時間の制約から資料の分析が表面的理解に留まる場面があり、頸城自由党員の証言といった史料をより丁寧に読み解く学習活動が必要である。第三に、評価については振り返りやアンケートに偏り、学習過程での思考の変容を捉える形成的評価の工夫が不足していた。今後は地域教材を基盤にしながらも単元全体を通して「社会の在り方を主体的に構想する力」へとつなげていく指導の工夫が求められる。すなわち、本研究は市民的資質の育成に有効である一方で、その深化と発展のための手立てが今後の課題であるといえる。

参考文献

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』東洋館、2018年、p.23では「学びに向かう力、人間性等」について、「涵養」という言葉を用いているが、本稿は、授業者の視点で記述しているため「育成」という言葉を用いる。
- 2) 伊東亮三「公民的資質とは何か」、日本社会科教育学会編『社会科における公民的資質の形成－公民教育の理論と実践－』東洋館、1984年、pp.19-20。
- 3) 永田忠道「公民的資質・市民的資質」、棚橋健治・木村博一編著『社会科重要用語事典』明治図書、2022年、p.10。
- 4) 森分孝治「市民的資質育成における社会科教育－合理的意思決定－」、社会系教科教育学会『社会系教科教育学研究』第13号、2001年、p.47。
- 5) 須賀忠芳「地域史からみる日本史教育とその試み－会津田島を素材に－」、日本社会科教育学会『社会科教育研究』No.86、2010年、p.12において、須賀は「学習主体に歴史認識を形成させ、歴史を実感させる術を模索する時、その最も効果的な方策の一つとして地域史を挙げることに異論はないだろう」と述べている。
- 6) 小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び学習要録の改善等について（通知）、〔別紙4〕各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨（小学校及び特別支援学校小学部並びに中学校及び特別支援学校中学部）【平成31年4月4日付け31文科初第13号初等中等教育局長通知による一部修正（小学校理科）】「https://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2019/04/09/1415196_4_1_2.pdf（最終閲覧2025年12月15日）」。
- 7) 前掲1), p.86。
- 8) 新村出編者『広辞苑 第七版』岩波書店、2018年、p.1252。
- 9) 前掲1), pp.112-114。
- 10) 上越市史編さん委員会『上越市史 通史編5 近代』上越市、2004年、pp.41-58。
- 11) 評価方法は観点の後ろに、「アンケート」はア、「ノート」はノ、「ワークシート」はワ、「振り返り」は振と示した。
- 12) 上越市ホームページ「<https://www.city.joetsu.niigata.jp/site/museum/senjin-politician.html>（最終閲覧2025年9月23日）」の「近代上越の政治家・思想家」に関する資料をもとに作成。
- 13) 上越市ホームページ「<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/koubunsho/tenji06.html>（最終閲覧2025年9月19日）」の「上田良平の証言」より作成。ここには「昭和47年1月15日発行の『広報じょうえつNo.9』の郷土・歴史散歩で、渡辺慶一氏は戦時中に行った高田事件最後の生存者・上田良平からの聞き取りを紹介しています。上田の証言には記憶違いと思われる部分もあり、すべてを鵜呑みにすることはできませんが、信越線開通に高田事件の影響があったことが推測されます」と紹介されている。